

学校防災アドバイザー派遣・活用事業の取組について

「震災～故郷への思い～」のカリキュラム開発を通して

飯綱町立飯綱中学校

1 本校の防災教育について

本校は、平成 29 年度から 1 学年総合的な学習の時間で防災教育「震災～故郷への思い～」を実践してきた。自分たちが日常生活を送る地域の自然災害に目を向けて、町のフィールドワークを通して、防災マップを作成し、いざという時にどう行動したらよいかを考えることで防災意識の向上を図ってきた。

さらに昨年度は「飯綱町学校防災防犯推進委員会」を中核にし、学区内の小学校との連携した小中合同引き渡し訓練を実施した。町全体で共同して防災に関わる取り組みを実践する気運も高まってきている。

今年度も新型コロナウイルス感染対策をしながらの教育活動であり、年度当初の計画も修正しながらの取り組みであったが、昨今県内でも大きな自然災害があり、防災教育については待ったなしの取組が求められている。そこで以下のような取組を行った。

2 今年度の主な取組

- PTA 講演会「飯綱の防災を拓く」
- 1 年総合的な学習の時間「震災～故郷への思い～」
- 保小中合同引き渡し訓練

3 今年度の取り組みの様子

(1) PTA 講演会「飯綱の防災を拓く」

今年度、1 年生の防災教育のスタートに当たり、生徒にとっても記憶に残る令和元年度の台風十九号による災害に触れないわけにはいかないと考えた。そこで、まだ復興の途中をお願いすることは憚られたが、木村さんと共にキャリア教育でお世話になっていた山口利幸先生（元長野県教育委員会教育長）に講演をお願いすることにした。

木村さんのお話などは、2・3 年生の生徒もお聞きする機会がなかったので、今年度は PTA 講演会で行うことにし、全校でお話をお聞きする機会にした。そして二人のお話の中から、これからの飯綱町、そして長野県の防災のあり方が見えてくるのではないかと考え、演題を「飯綱の防災を拓く」とした。

山口先生からは、「災害から学ぶ」との題で、被災で奪われたもの、そして奪われないもの、その中から人の温かさやボランティア活動の大切さを生徒に語っていただいた。



(生活記録より)

「災害ってわかっているけど、止められないんだな」と思った。木村さんは何の予告もなく、家族も失ってしまった。山口さんのお話では「お金では買えないものが失われてしまう」と言っておられ、すごく怖かったです。でも、何とかしようとポジティブに考えて行動した木村さんや山口さんはすごい人だなと

思った。そして、八十歳や小学生のボランティアのお話をお聞きして、驚きました。

二人とも力仕事はできないけど、自分にできることを考えて行動していたことは、見習わなければならないなと思った。そして僕もボランティアに参加して、困っている人を助けたい。

お話から学んだことや思いを活かして防災学習を学んでいきたいし、いつ災害が起きても焦らずに行動できるようにしたいと思った。

木村さんの話を聞いて、木村さんは佑奈さんのことをずっとあきらめないで捜していて、すごくかっこいいなと思いました。ぼくたち長野県民は津波の経験などないため、津波に対する理解が乏しいと思いました。でも千曲川の氾濫も、津波と似ていると思います。「まさか氾濫なんてしないだろう」と思って、津波、洪水になってしまうことが多い災害なので、僕たち飯中生は木村さん山口さんから教えていただいた災害のこわさ、そして災害のとき何をしたらよいのか、もう一度振り返って災害のとき動けるようにしたいです。

木村さんのようなことがあったら、僕も同じくあきらめずに探し続けます！！山口さんの話からボランティアという話が出てきました。僕は人を助けることが好きなので、これからどんどん積極的に行きたいです。そして人を助けて全員を笑顔にしたい！！

木村さん、山口さんのお話を聞いて、あらためて「災害って怖い」と思った。災害が起きてしまったら、たくさんの命が失われてしまうかもしれない。だから1人でも助かるように、ハザードマップを細かいところまで調べて、つくろうと思った。災害で家族や友人に会えなくなるかもしれないから、家族や友人を大切にしたいと思った。本当は災害なんか起きて欲しくないけど、もし災害が起こってしまったその時は、焦らず安全に行動したい。どんな災害が起きても、対応できるようになりたい。また、その対応の仕方を家族や近くの友人と教えあって確認できるようにしたい。

(2) 1年総合的な学習の時間「震災～故郷への思い～」

1年総合的な学習の時間「震災～故郷への思い～」の中核は防災マップづくりに置いている。信州大学の廣内先生がつくられた防災マップのシステムは、ネット上の地図に町のハザードマップを読み込み、実際に生徒はタブレットをもって地域を巡り、その上に防災に関わる情報を入力して、防災マップを作成していく。



生徒は自分が生活する家付近でも、災害を想定して生活すること

は少なく、町が全戸単位で配布するハザードマップを見た経験がある生徒もほとんどいなかった。学習を進める中で、「地震のときはこの壁は崩れるのではないか?」「お年寄りには危なくないか?」など、生徒はいざという時を考え、普段生活している地域を防災という観点で見つめ直していく。その中で地域の新しい側面を発見するとともに、生徒は「共助」を意識していく。

防災マップ作成の目的を考え、グループは学級の枠を超えて地区ごとで行っている。フィールドワークには学区が広範囲に及ぶので、町や社会福祉協議会にお願いし、バスでの移動が可能になった。

また、職員だけでは引率ができないため、町内の日赤奉仕団や信州大学の学生に協力を仰ぎ、一緒に地区を廻っていただいた。

地域の間人関係が希薄になってきている昨今、生徒たちにとって大人との関わるいい機会になっている。また、防災という共通の話題があることで大人たちにとっても生徒と話すことのハードルを下げている。

(生活記録より)

フィールドワークがありました。僕の班は東黒川を回りました。消火栓や防火水槽、町民会館など色々な所を見て回りました。タブレットのアプリで写真を撮りながら危険箇所を確認できたので、あらためて災害って身近にあるんだなと思いました。久しぶりに東黒川内を自転車歩いたので、とても楽しかったです。一緒に付き添ってくださった〇〇さんのお話も知らないことが多くて、東黒川に少し詳しくなったと思いました。東黒川の災害について深く知れたのでよかったです。

2回目のフィールドワークがありました。今回は、前回と違う目的として、自分の地域の危険箇所を確認しました。僕の班は前回のフィールドワークで、水害が起きそうな場所や、火災が起きたらどこに行けばよいか、防火水槽や消火栓の場所などを調べました。今回は水害や地震で土砂崩れが起きそうな場所、

前回行けなかった地区の奥の場所を調べることにして調べました。合計起きそうな場所を八ヶ所以上調べました。さらにどこに水害や火災、地震が起きたらどこに避難すればよいかも、調べることができてよかったです。



フォールドワークをしました。雨の中、やりたくないなとかいろいろ不安だったけど、晴れてよかったねと本当に思いました。データが少なかったのも、土砂の危険や消火栓とかをたくさん取りました。多分、意外と消火栓ってあるんだなと思ったし、山しかないからもし災害が起こって土砂崩れが起きたら怖いなあと思いました。前より早く目的地につくことができました。

(3) 保小中合同引き渡し訓練

一昨年度、町に協力いただいて「学校防災防犯推進委員会」を設立していただいた。この組織は町行政や消防署など、関係諸機関が集まり学校防災について協議する組織である。この委員会が中心になり、昨年度は小中そして今年度はさらに保育園も加え、町が管轄する学校が連携した訓練「保小中合同引き渡し訓練」を行った。子供たちを保護者に引き渡すとき、保小中が連携していなければ、交通渋滞の問題など円滑に引き渡すことはできない。

保小中にお子さんのいる家庭は中学生から引き渡すという前提で、小学校へ向かう保護者の迎えの車の経路を考えた。また、校内での引き渡しに関しては、災害時であるので「学級担任と保護者」という顔がわかる安心感を持てるように学級ごとの引き渡しとした。



(生徒生活記録より)

避難訓練と引き渡し訓練がありました。避難訓練はいつあるか分からなかったのも、いろんな時を気にしていました。でも本番は当然いつ起こるか分からないので、とてもいい訓練になりました。私は音がなっただけからすぐに机の下に隠れること

ができたのでよかったです。避難場所に移動するときや引き渡し訓練も静かに落ちついてできました。地震は自然災害なので、普段から備えておくことがたくさんあるので家でもいろんなことを確認しておきたいです。

4 事業の成果及び今後の課題

今年度新型コロナウイルス感染症感染防止対策を考えた中で、様々な場面で制約を受けながら教育活動であった。防災教育も多々計画を変更せざるをえなかった。

しかし、そんな中でも信州大学や地域の協力を仰ぎながら、一学年の総合的な学習の時間で防災教育が実施できた。

また、一昨年度設立した「飯綱町学校防災防犯推進委員会」が機能し、保小中合同引き渡し訓練を行うことができた。また、実際に訓練を実施したことで具体的な課題も明確になった。

公助の取り組みは一学校ではその目的を果たさない。今後とも推進委員会を通じて、他の組織と連携していきたい。また、さらに保護者の立場に立った引き渡し手順の小中共通化などを行い、多様な状況を想定した訓練を実施していきたい。

自然災害は後を絶たない。防災教育もいざという時を考え、歩みを止めずに進めていきたい。

(文責 教諭 伊藤 秀雄)

防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取組について

- 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練の実施および
SDGs の視点で取り組んだ防災教育について —

白馬村立白馬中学校

1 はじめに

白馬村は長野県の北部に位置する人口約 9,000 名の村である。本校は、生徒数 208 名、職員数 28 名の山間中規模校である。保護者の多くは本村の基幹産業であるスキー場や宿泊施設で働いている。また、本村は、神城断層の



上に立地しており、平成 26 年 11 月 22 日には、県北部を震源にした最大震度 6 弱を観測した地震（神城断層地震）の被害を受けている。豪雪地帯であるために家屋が比較的頑丈な造りであったにもかかわらず、特に堀ノ内・三日市場地区の被害は甚大で、全壊または半壊した家屋が多く見られた。幸いにして、命を落とした方はおらず、「白馬の奇跡」と言われている。現在在籍中の中学生の多くが小学校の低学年の時であり、全校生徒にとって記憶の鮮明な震災である。

学校安全総合支援事業 5 年目となった今年度も、昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため当初の計画通りに進めることができない中、信州大学の廣内先生、信州大学院生の奥山さんのご指導をいただきながら進めてきた。

2 白馬村立白馬中学校の防災体制について（概要）

本校は、年間 3 回の避難訓練を実施している。また、災害時には学校安全管理マニュアルに従って、教職員が防災組織を使った対応をしている。さらに、安全の日を月 1 回設けて、校内の各自の管理場所を点検している。

(1) 年間の避難訓練計画

- ・ 第 1 回避難訓練 4 月 14 日

【目的】緊急地震速報を利用し、学校管理下における生徒の安全確保及び、教室からの避難の仕方・避難経路の確認

- ・ 第 2 回避難訓練 9 月 1 日

【目的】緊急地震速報を利用し、大地震発生に伴う生徒及び職員の安全確保を迅速に、確実に行う。

- ・ 第 3 回避難訓練 11 月 5 日（11 月 22 日が神城断層地震発生日）

【目的】学校管理下における生徒の安全確保と冬季の避難経路の確認

(2) 避難訓練の工夫

① 防火扉の作動

本校では、実際に災害が発生した場合に防火扉がどのように作動し、景色がどう変化し、動線が規制されるのかを職員及び生徒に実感させるための訓練を実施している。昨年度に引き続き9月1日の避難訓練の際に防火扉を作動させ、進路が塞がれたり、規制されたりする中で、避難の仕方を確認した。昨年度のご指導を受け、今年度は、授業時間ではなく、生徒が教室の外にもいる休み時間に発報し、個々が自分の判断で避難場所に避難する行動訓練を行い、「想定外の事態」を減らすことにつなげた。



② 避難経路の設定

本村は、冬になると屋根から大量の雪が落ち、通常で定められている避難経路を使えなくなる。そこで、第3回目の避難訓練は教室前のテラス付近が雪で塞がっている状態で火災が発生したという設定で、訓練を実施した。

出火場所を避けて避難する場合に、場所によっては、一度階段を使って、階上に上がってから避難するという場面もあり、通常経路を臨機応変に変更しなければ安全に外部に出ることができない。落ち着いて放送を聴くこと、冷静かつ瞬時に判断することが必要であり、職員や生徒にとって、緊張感が必然的に生じる訓練となっている。



③ 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

今年度は2回の避難訓練で緊急地震速報対応訓練（シェイクアウト訓練）を実施した。警報音が流れると、生徒たちは、廊下では窓際を避け、頭を守る場所があれば近くの机の下に入るなど、冷静な対応ができ、放送での指示も落ち着いて聞く行動がとれた。これまでの訓練の積み重ねにより、警報への反応がよりスムーズになった。



3 学校防災アドバイザーの関わり

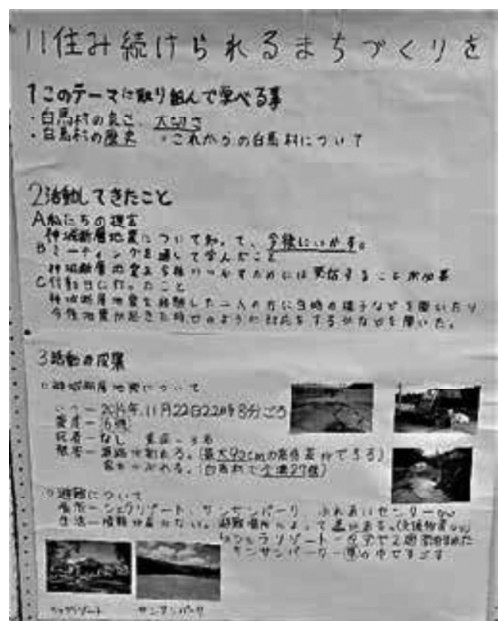
本校は、信州大学の廣内教授にご指導をいただいている。年度のはじめに訪問いただき、今年度の方向についてご指導いただいた。

今年度の力点の一つに「SDG s の推進」を掲げており、防災につながる内容をSDG s の視点で取り組みたいと相談させていただいたところ、快く引き受けていただくことができた。3年生の総合的な学習の時間で、生徒が自分の興味関心に基づいて追究したいSDG s の17の目標を決めだした。その中に、「11 住み続けられるまちづくりを」を選び、神城断層地震について調べ、今後の私たちの生活やまちづくりにいかしていきたいという願いを持った生徒がいた。そこで、廣内先生に相談したところ、信州大学院生の奥山さんを派遣してくださり、複数回にわたって生徒とともに活動して下さったり、アドバイスしていただけた。

生徒は、役場の方や実際に被災された方に話を聞きに行ったり、当時の様子を調べたりしたことをまとめ、10月の総合発表会(文化祭)で発表を行った。

＜生徒の感想より＞

- ・地震がどれだけおそろしいことなのか、その後どのように行動するのが適切なのかなど、たくさんのことを学ぶことができた。
- ・地震の怖さや避難してからの生活、今の暮らしがどれだけありがたいことなのかを知ることができた。
- ・色々な人のお話を聞いて、改めて地震の怖さやその後の大変さ、そして白馬村の強さを知ることができて、いい経験になった。



さらに、11月22日に白馬村と信州大学が開催した「神城断層地震7周年報告会」に参加し、学んだことを発表する機会をいただいた。学校内で完結せず、地域とのつながりをコーディネートしていただけたことで、生徒の学びもより豊かなものになった。



4. まとめ (事後の成果及び今後の課題)

今年度は昨年度の取り組みをいかし、実施時間を工夫することで、コロナ禍にあっても避難訓練の機会を減らすことなく行うことができ、短時間でも真剣に取り組む生徒や職員の姿が見られたことは、これまでの積み重ねの大きな成果の表れであった。

本校は、学校安全総合支援事業5年目を終える。今後は、コロナの影響で実施できなかった引き渡し訓練や登下校時に災害が発生した場合などの「想定外の事態」を減らしていくことを継続していきたい。

先日、台風の影響で土砂崩れ等の被災をされた学校の先生から、「事前にあった被災時の引き渡しマニュアルは全く役に立たなかった」というお話を伺った。特に、被災時の引き渡しマニュアルについては、想像力を働かせ、より実際に災害が起きた場合を想定して見直していきたい。

さらに、信州大学の廣内先生と院生の奥山さんからは、本校の思いに寄り添い、適切なお助言をいただくことができた。特に、SDGsの視点から神城断層地震を見つめ直し、生徒の防災や地域に対する意識を高めるご支援をいただくことができて、大変ありがたかった。また、学校内の学習活動にとどまらず、村や大学の活動と生徒をつないでくださったことで、生徒の学びがより豊かなものになった。貴重な機会と、今後の学びの可能性を感じることができ、とても感謝している。

今後、来年度以降も続くと思われるコロナ禍において、様々な工夫を通して実践や検証を積み重ねつつ、職員および生徒がともに考えながら、防災への意識を高めるための取り組みについて考えて実践していきたい。

(文責 教頭 後藤 理)